

## 福島SAND-STORY物語 「2.5×3mからの発信」

Fukushima Sand Story: Using the Power of Playing with Sand to Recover from the Great East Japan Earthquake

笠間浩幸

Hiroyuki Kasama

同志社女子大学教授 / 1958年生まれ。大阪教育大学大学院修了。長年、砂場の歴史と子どもの砂遊びを研究し、「砂の遊びとアート」ワークショップを全国で展開。NPO法人福島SAND-STORY理事長。IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）日本支部代表。著書に『〈砂場〉と子ども』ほか。

2017年2月26日、筆者が理事長を務めるNPO法人福島SAND-STORYが主催となり、福島市にて「福島 砂場シンポジウムin いざか ～2.5×3mからの発信～」を開催した。「2.5×3m」とは、前年10月、福島市飯坂町の乙和（おとわ）公園という街区公園に設置した砂場の大きさである。公園の砂場としては決して大きくはないが、そこに震災と東京電力福島第1原子力発電所の事故から6年目を迎えた福島の子どもたちが抱える問題と解決への糸口を見いだすことができると考える。

### ひとたび失いかけたから こそ……

近年、全国的には公園への砂場設置は珍しい。しかも、既存の公園へとなればなおさらだ。その理由は、犬や猫の糞尿による汚染を嫌って砂場の利用が減ったことや、頻繁な清掃や砂の補充に行政が対応しきれなくなったことによる。

乙和公園への砂場の設置は、①地域住民が強く望んだ、②行政が地域住民の希望を真摯に受け止めた、③砂場の設置費用を行政とNPOが分担し、設置後の活用や運用への見通しを明らかにした、ことによって実現した。背景には福島ならではの理由があった。それは、福島県が原発事故によって、一時期、この大切な砂場環境を失いかけたことである。子どもたちは、砂遊びはおろか、道端の小石や木の葉に触れることさえ禁止された。当たり前であった子どもの遊びや遊び環境が失われたとき、人々はその大切さを初めて強く認識し、行動を起こしたのである。

### 砂場環境の取り戻し

2011年6月1日の毎日新聞は「室内砂場に園児の笑顔」と題して、福島学院大学付属幼稚園の教職員が遊戯室に手作りした砂場で遊ぶ子どもたちの様子を紹介した。同12月23日には、郡山市に75m<sup>2</sup>の砂場を持つ大型の屋内遊び場

「ペップキッズこおりやま」が誕生した。これは県内大手の小売り業ヨークベニマル社が、郡山市の菊池信太郎小児科医師らを中心とする子どもの心のケアを行う団体に無償で場所と資金を提供して実現したものだ。オープン当日、ある母親はわが子を眺めながら「こういう遊びを本当にさせてやりたかった」と涙ぐんだ。また、子どもと一緒に遊んでいた父親は「こんなことがどれほど大事だったか、皮肉にも今回本当によくわかった」と半ば吐き捨てるように語った。その後も福島市、本宮市等、屋内砂場の設置が次々と進んだ。

筆者は長年、砂場環境や砂遊びと子どもの発育・発達の研究を続けてきた経験から、このような動きにかかわった。その過程では、横浜のユニケイ社からコンテナ砂場をつくるためのコンテナ、ハリオグラフ社からホワイトサンド、ナムコ社から砂場用エアプール、ポネルンド社から砂道具等、さまざまな支援もいただいた。2013年11月には、「福島インドア砂場サミット」を福島市民会館にて開催。そこで、



図1 2.5×3mの砂場



図2 ペップキッズこおりやまの屋内砂場



図3 コンテナ砂場

屋内砂場は放射線対策のみならず、子どもの育ちや子育て環境として必要不可欠なものであることを確認し、引き続き砂場環境の改善と充実を図っていくというアピールを採択した。ひとたび砂場を失いかけた福島県だからこそ、その重要性を誰よりも強く語ることができるのであり、また語るべきであると考えた。ここに「砂の物語」の扉が開いた。

## 「砂の物語(サンドストーリー)」の取り組み

物語の第1章では、駅前や町中の広場、郊外の公園等に30m<sup>3</sup>ほどの福島県棚倉町産の川砂やオーストラリア産のホワイトサンドをブルーシート上に置いた巨大砂場を設置し、子どもから高齢者までが一緒になって楽しめる「砂の遊びとアート」プログラムを展開した。毎回数百～数千人単位の親子、市民が訪れたが、会場にはコープふくしまの協力による“ホスピタリティ空間”と称する、親子が休息したり、保護者が子どもの遊びを見守ることができるスペースを必ず設置した。そこでは、母親が気軽に食育や子育て相談がで



図4 砂の遊びとアートイベント

きるのだ。

第2章では、上記イベントで使用した良質な砂を、保育所・幼稚園・小学校・学童施設等は無償で提供した。これまでその数は30カ所を超え、乙和公園の砂場にもこの砂が入った。

このような取り組みを多様な人々や組織、企業、行政等と連携しながら進めてきたが、そのたびに、砂は子どもを育て、人と人をつなぎ、町や地域をつくる力があることを強く実感した。さらに、それは単なる砂場環境の取り戻しに留まるものではなく、子どもにとって本当に大切なものは何かを見つめ直すことであり、全国の先進的事例として発信すべきものとなった。2016年11月にはその発信を東京都杉並区が受け止め、同区の一大会イベントである「すぎなみフェスタ」において福島スタイルのイベントが展開され、たくさんの親子が夢中で砂にまみれ歓声を上げた。

## これからの課題と役割

今、砂場環境の整備・充実はさらに新たな意義を持ち始めている。それは子どもの肥満や運動能力の低下等、健康問題とのかかわりである。原発事故以降、福島では屋外環境の改善や運動遊びの充実必死に取り組んできた。その一定の成果は見られるものの、今なお、幼児期から中学生までのほとんどの学年において、肥満の出現率が全国平均の1.5倍から2倍近い数値を示している。これは屋内で

の生活や活動の習慣化・固定化によるものであり、前述の菊池医師は将来の健康を損なう大きな問題として警鐘を鳴らす。今強く求められることは、ことさらに何か特別な運動やスポーツを行うことよりも、幼児期から日常的に体を動かすこと、身近な自然のなかで友だちと楽しく遊び回ることであるという。

福島ではまた、コミュニティの再構築も喫緊の課題である。仮設住宅や災害公営住宅での生活を営んでいる人々、避難先から戻ってこられた人々、福島に残るという選択をしてきた人々。この6年は、家族の数だけ、さまざまな苦しみを負い続けた年月であった。

これらの課題にどのような具体策をもって取り組むべきか。「砂の遊びとアート」はまさにこの役割を果たすにふさわしい答えのひとつとなる。砂場では一人ひとりが主役となり、その遊びは世代を超える。友だち、家族、地域をつなぐ。そして、その地域こそが子どもたちを育て、未来を育む大切な場となるのだ。

たかが砂遊び、しかしその「たかが」がいかに重要であったかを、福島は身をもって感じてきた。ところが、全国的には今、その大切な砂場が大人の都合で敬遠され、公園から消えようとしている。

2.5×3mの砂場は訴える。かけがえない財産を決して失ってはいけないと。

福島SAND-STORYは、これからも福島の夢と希望を発信し続ける。物語への新たな1ページを共に書き加えていただければ幸いである。



図5 サンドアートフェスティバル(福島市と連携事業)



図6 すぎなみフェスタでの砂場会場